
東方百目鬼

飛び交うマヨビーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方百目鬼

【Nコード】

N8832Y

【作者名】

飛び交うマヨビーム

【あらすじ】

初投稿です。これは外来人でもない、人間でもない幻想郷の住人である妖怪「百目」が悪戦苦闘しながらも必死に生き抜く物語。

序章、いわゆるプロローグ（前書き）

はじめまして、飛び交うマヨビームです。

今回この作品が初投稿です。

思いつきで書き始めたので、いろいろと不安がありますが、頑張ろうと思います。

よろしく願います。

ではごっげ。

序章、いわゆるプロローグ

Side 龍神

幻想郷。それは幻想となつた者が流れ着く場所。人間や妖怪、さらには神がそこで暮らしている。

季節は夏。細かく言うなら梅雨の時期。

何時もの様に、幻想郷を視察する。

見たところ、今はなにも起こってないようだ。

ふと、妖怪の山の方へ見る。

妖怪の山には少しではあるが、気になる存在がいる。彼だ。

その存在は妖怪『百目』。名前の通り、身体に複数の目がある。

だが彼にはそのような物は見当たらない。どうやら顔の2つ以外の目は全て閉じているらしい。

それに、容姿は完全に人間なので、彼を人間だと思ひ込む者も少ない。

当の彼は、その事に関して便利なのか不便なのか曖昧なようだ。もう少し、彼を見てみるか。

生れ付き幻想の最後の1人を。

第1話 嘘つきいっくんと碎けたあやちゃん(前書き)

飛び交うマヨビームです。

サブタイトルはこんな感じでパロディさせようと思います。
本編との関係はほんの少しだけです。

第1話 嘘つきいっくんと砕けたあやちゃん

Side 妖怪『百目』

・・・ジメジメする。

此処、妖怪の山はただいま季節限定で絶賛梅雨の真っ最中で蒸し暑くなっている。

多分、此処以外の所にもそのような事になっているだろう。

何故多分なのかと言うと、幼い頃以来外に出てないから。箱入りである。

なら幼い頃のことは憶えているのかと言うと、答えはYESだ。

憶えてはいるが、その時に起こった事件の方が強く記憶に残っている。

目の前で俺を除く家族や他の百目一族が皆殺しにされたあの日。

俺は独りになった。閑話休題。

今俺は、食料を集める為に山でうろついている。

茸と木の実、それに先程狩った猪が今回集めた結果だ。

それを自分の小屋に運ぶ。猪の足を片手で持って引きずり、もう片方の手と胸元で茸と木の実を持ち抱える。

しばらく歩くと、小屋が見えてきた。木で出来た簡単な小屋だ。

この辺りは茂みが多く、隠れて住むのに外せない所だ。特に俺みたいな訳有りな奴に。

小屋の扉まで行っ「あやや、こんなところに人間なんて珍しいですね・・・」死ぬかと思った。

振り返り、声の主を見る。

「久しぶりですね、文さん」

「そう言ってる君はいつぞやの百目クンじゃない」

射命丸文と奇跡の再会みたいな。

「あれ”から何回か会ったけど、随分大きくなったわね。一樹ク
ン」

“あれ”とは先程言った事件のことで、一樹は俺の名前だ。姓は七
目である。

「最後に会ったのは半年前なのに、そんなに変わります？それとも
子供じゃないんだからクン付けはやめて欲しいんですけど」

あと5年で立派な妖怪になるというのに、何時までも子供扱いだと
恥ずかしい。

それに見た目だって（自分で言うのも何だが）人間の青年に似てい
る。その所為で人間と勘違いされることが多いが。

「私から見れば、君は何時まで経っても子供よ。それに、妖怪は精
神に依存してるから半年で成長なんて呼吸するぐらい当たり前の事。
それでも君は子供のままだけど」

2回も言われた。地味に傷付く。

「それで、今日は何か御用なんですか？」

「あ、そうそう。一樹クンに朗報があつて」

「朗報？」

「そ。もう少ししたら元服だし、家族がいなくて生活に困っている

だろうから寝床はやれないけど、私の新聞のお手伝いしたらそれ相應の報酬はくれるって大天狗様が許可してくれたの」

これは確かに朗報だ。それを引き受ければもう1日中山の中をうろつく事はない。

それに山の外へ出掛ける事が出来る。種族は百目でも、顔の2つ以外の目を瞑っていれば問題ない。

とは言っても、普段からそうしている訳なのだが。妖力と身の安全の関係で。

「わかりました。じゃあ何時からそれをすればいいですか？」

「決まっているじゃない。今すぐよ」

「その前にお昼にしませんか？」

「んー。まだ食べてないし、そうしようかしら」

「じゃあ、中へどうぞ。料理は俺が作ります」

「期待してるわよ」

こうして俺たちは小屋へ入っていった。

ちなみに此処までの“場面”は予め妖怪『百目』としての能力で『視て』、知っていた。

よって先程の死ぬかと思ったは半分嘘になる。かと言って驚かない訳ではない。後ろから話し掛けると大体はそうなる。閑話休題。

さて、此処まで来たという事は

そろそろ動いていい頃合いかな。

第1話 嘘つきいっくんと碎けたあやちゃん(後書き)

感想・意見があったらお願いします。

第2話 七目一樹の赤面（前書き）

昨日はすみませんでした。

更新するの忘れていて・・・。

初っ端からこんなので大丈夫かと思われるようですが、

大丈夫です、問題ありません。

第2話 七目一樹の赤面

Side 一樹

「「うちそうさま」」

あ、ダブった。

と思いながら食器を片付けているのは、俺こと七目一樹である。

一方、椅子に座り食後のお茶を飲んでいるのは射命丸文。

つい先程、昼食を食べ終わった所な訳で今の状況に至る。

ちなみに今日の昼食の献立は、文さんから貰ったお米で炊いたご飯と狩ってきたばかりの猪の生姜焼き、ついでに豆腐の味噌汁だった。作ったのは俺である。箱入りでも料理できるんだからな。

この小屋にはかまどがあつて、それで工夫しながら料理を作っている。

ただ、かまどなので炊いたり煮るのは問題なく出来ても、焼くなどといったものは一度釜を外し、鉄板を取り付けなければならぬ。まあ慣れてるが。

「これ飲み終わったら行くわよ」

「わかりました」

今日は文さんの職場で新聞のお手伝いがある。

そこで働くという事は、あの大天狗さんはある程度俺を許してくれている、という事になる。

誇り高き天狗一族が『今は亡き幻想の骸』を保護する訳には

いかない、か。

それでも文さんは、俺なんかのために必死で大天狗さんに頼んだ。ならばバレないように保護をすればいい、勿論自分が受け持つ、と言ったものの、山のトップである天魔様にバレたらなにをされるかわかったものじゃない、と返され文さんは諦める事しかできなかった。だが、代わりとして小屋と食料ならなんとか出来ると言われ、俺と文さんは安堵の息をついた。

俺から見て、文さんと大天狗さんは恩人だ。特に文さんは姉のような存在で、とても頭が上がらない。

一旦、脳内時間旅行を中断させ文さんの方を見る。丁度湯呑みの中身を飲み干した所らしく、外に出る準備をしている。食器の片付けはとづくに終わっていたので、俺も準備をする。とはいっても、仕込み杖を細い帯で腰に巻き付けるだけなんだが。

「じゃ、行こうか」

「はい」

短く返事を済ませ、小屋を出る。続いて文さんも出てくる。戸を閉めて文さんと歩き出す。文さんの職場は此処から歩いて5分の所にあるので、そこを目指す。職場と言っても、屋敷だから家でもあるんだろうけど。

それにしても、文さんと横に並んで歩くのは久しぶりだな。幼い頃以来だ。半年前は現状報告と食料の調達を済ませてからすぐに帰って行ってしまった。幼い頃の懐かしさが滲み出てくるのを感じる。

ついでに胸の鼓動が速くなるのも。これは俺がそういう年頃だから仕方ないとして。

side 文

しばらく歩くと、私たち烏天狗が住んでいる屋敷が見えてきた。

「見えてきましたね」

「取り合えず着いたら、先に大天狗様のところに行くわよ」

「はい」

・・・やっぱり違和感あるなあ。

一樹が小さかった頃は文お姉ちゃんって甘えてたのに、今では他人行儀。あの頃は可愛かったのになあ。

「ねえ一樹」

「はい、文さん」

しかもさん付けだし。

「その他人行儀みたいなの、やめてほしいんだけど。寧ろ前みたいに甘えていいのよ？」

「遠慮します。それに、恩人にそんなことはd「出来ないというか、頭が上がらないだけでしょ」「はい……」

「全く、そんな事はいいつて言ってるのに。いい？これから私の事は呼び捨てで呼んで、タメ口で話す事。異論は受け付けないから」

「でm「異論は受け付けない」……わかったよ」

おっ、ついに砕けた。って思ったら、一樹の顔が赤くなった。「どしたの」「……なんでも」「ふーん」

顔を覗き込んだら逸らされた。よく考えたら一樹はそういう年頃なんだっけ。私のメロメロボディーにやられたんだな、きつと。

気がついたら目の前には屋敷の玄関まで来ていた。一樹を見ると真剣な顔つきで立っていた。しかし緊張しているためか、何処かぎこちない。大天狗様に会うんだもんね、緊張するに決まっている。……でも。

でも大丈夫だからね。

「
私
が
い
る
か
ら
」

私が傍にいるから

第2話 七目一樹の赤面（後書き）

射命丸文の口調を原作を意識して書いてみました。
あれ、崩れてないか？

主人公設定（前書き）

見ての通り主人公設定です。

主人公設定

（主人公設定）

名前 七目一樹（ななめ いつき）

種族 妖怪『百目』

能力 ありとあらゆるモノを視る程度の能力（森羅万象を観測する程度の能力）

今の所の二つ名

・ 生れ付き幻想の最後の一人

・ 今は亡き幻想の骸むくろ

容姿 顔は外来人の男と間違えられるような美形。瞳の色は黒で、
優男。

髪は背中の中辺りまで伸びており、後ろで一つに纏めて
いる。所謂ポニーテール。

身長は175？弱。

服装は薄めの灰色の上下服の上に紺の着物、黒ブーツ。銀
さんを連想させるような感じ。

でも右袖もちゃんと着てる。仕込み杖を装備している。

一言でまとめると優男（っぽい妖怪）。

能力説明

一樹の能力は百目としての能力で、他の百目にも持っている共通したもの。

効果は過去や未来、心の中だけでなく、すべてを見ることが出来る。

しかし、使うとかなりの妖力を消費するため、普段は顔の2つ以外の目はすべて閉じている。

使用時間や回数も制限している。

作「とまあ、こんな感じかなと思うけど、どうよ？」

一「普通だな」

文「普通ね」

作「よかった」

—「何故に？」

作「普通が一番だと思っから」

—「オチなしだな」

文「オチなしね」

作「．．．」

主人公設定（後書き）

一樹の過去については、今度の機会にします。
紅魔郷辺りがいいかな。

第3話 とある百目の意志表明（前書き）

はい、またやらかしました。ホントすんません。
でも考えてみたら、日曜日の方が更新しやすくね？
と思ったんで次から日曜日に更新します。
マジですみませんでした。

第3話 とある百目の意志表明

Side 一樹

まさか、心臓が止まりそうになったのが今日で2回もあつたなんて、思いもなかった。あの場面を予め知っていても、大天狗さんから溢れ出すあのオーラを感じ取れずにはいられない。物凄いプレッシャーだったなあ。今は大天狗さんに会って、許しをもらった所。大天狗さん曰く、他の烏天狗にバレないようにしろとの事。まあ俺みたいな妙な奴が此処でうろろしてたら、大騒ぎ間違いなし、死んだ家族も化けて出てきながら目玉を飛び出すんだろう。・・・ありえないんだけどさ。閑話休題。

文に連れられ、廊下を歩く。そういえば、いいんだろつか。恩人ならぬ恩鳥に呼び捨て且つ、タメ口で話して。異論は聞かないって言ってたけど。

「はい、此処が私の職場よ」

うん、如何にも新聞を作つてそうな所だ。

「それで、俺のスペースは？」

「あそこの机。あと同僚もいるから」

文が指で指したのは1つの何にも置かれていない新品の机。それと同僚つてのは多分幼い頃、偶然会った姫海棠はたての事だろう。憶えてるかな。

「それと、どう仕事すれば？」

「決まってるじゃない。君の能力でネタを回収するのよ」

あ、思ったとおり。

「それをメモっていくわけか」

「その通り」

慣れって怖いな。気が付いたらタメ口がデフォルトになってる。

「でも、何故ライバルであるはたてさんが此処で作業を？」

「同僚がはたてだとよく分かったわね。はたてが発行してる新聞は人気が私のより低いから此処で新聞の勉強をしているって言われてあの有り様よ」

「聞こえてるわよ」

「そりゃ聞こえるようにわざと大きく言ってるんだから。弱小新聞記者さん？」

「ふんっ、最低な記事しか書けないアンタに言われたくないわね」

両者が睨み合う。視線の間に火花が散っているように見えるそれは……って呑気にそんな事思っていないで止めないと。

「ま、まあ一旦落ち着いて。お茶は俺が淹れて来るから」

「……まあいいわ。それにしても、まさか一樹君が此処で働く

とは思わなかったわ」

「大天狗様から許可を貰ったの。せめて職はくれてやるってね」

「似てないわよ。「(イラスト)」で、一樹君はこれからどうするの?」

「取り敢えず、今日此処で1ヶ月分の仕事をして給料貰う予定です。はい、お茶」

「ん。て事はなんか予定あるの?」

「はい。人里に行こうかと」

「なら、案内しよつか?」「待ちなさい、はたて」「なによ。急に」「一樹クンを人里に案内するのは私よ」「先に言ったのはアタシよ」「ざんねん。先に予約したのは私でした」「あの、1人で行くだけだ」「黙って」「・・・はい」

なんか酷いな。

結局、なんとか落ち着かせて2人が俺を案内するという提案をした所、2人は嫌な顔をしながらも まあ、一樹クン(君)が言うなら と了承した。・・・ん?これって両手に花?

それはまた後でにして、早速作業に取り掛かる。メモとペンを用意してから能力を発動する。能力の名前は“ありとあらゆるモノを視る程度の能力”、または“森羅万象を観測する程度の能力”。これは百目なら誰でも持っている能力だ。

発動と同時に、全身の眼が開く。掌や顔の2つの目の下、脚など

の部位の眼が開いていくのを不気味な程に感じる。

「なんか不気味ね……」

「妖力も桁が違うわ……」

2人の声に全く気にせず、メモを書いていく。ん、やっぱりか。

「これでよし、と。はい、これ」

「ん。どれどれ……。ん？異変が起こる？」

「そ。空が真っ赤になる異変。主犯は霧の湖の近くの赤い屋敷の主で、俺はそれが起こったら記事ネタのついでにどうにかしようと思ってる」

「でも一樹君、どうしてそんな事を？」

「あそこには、俺と同じ孤独を味わっている奴がいる」

「「……」」

2人が黙り込むのは滅多に無い事で、だが俺にとっては慣れていて。彼女達は俺の過去を知っている。だから黙っているんだろう。

「でも、大丈夫なの？百目がまだいるって知られたら……」

文が顔を俯く。だけど。

「勿論。バレた所で狙う奴は少ないだろう。」

少ないって言っても、その狙う奴が大体実力がある者しかいないけど。

「それに、俺と同じ想いをしている奴を放っておくわけにはいかない。異変を解決するのも、面倒事を避けるついでだ」

俺は狙われるより異変の方が面倒だと思っている。とぼつちりを食らったら大変だからだ。さて、意志の表明が終わった。報酬を貰いに行くか。

「で、仕事はもう終わったんだけど」

「・・・あつ！そうだったわね。はい、一ヶ月分の給料」

「ん。じゃあ俺はこれで。お疲れ様でした」

文から報酬を受け取り、仕事場から撤退する。

・・・異変が発生するのは梅雨が終わってからか。それまでに準備をしなければ。まあ、まずは準備するついでに、人里を歩くか。うん、まだ焦らなくていいんだ。

それに、今は独りじゃない。

第3話 とある百目の意志表明（後書き）

はい、今回ははたて登場です。

2人とも一樹を弟として可愛がつて（？）います。

実は1人の男性として意識しているかも。

あれ、これハーレムのタグ付けるんじゃない？

第4話 文&はたてwith一樹 前編(前書き)

1日早いですが投稿。次回はもっと早くなるかもです。

第4話 文&はたてwith一樹 前編

Side 文

一樹くんが出て行った後、私はしばらく呆然していた。

「……………ハッ」

どうやらはたてもそうみたい。…………っじゃなくて!!

「忘れてた!急がないと!!」

さっき一樹くんと約束してたのに!!

「お先に！」「あ！待ちなさいよ！」

はたてを置いていって一樹クンのもとへ急ぐ。このままうまく合流すれば、一樹クンと2人つきり・・・ってナニを考えてるのよ！それはまた今度にして、今は探す事だけ考えなきゃ。

今頃、一樹クンは大天狗様への挨拶が終わってるだろうから此処を出て1人で人里に行こうとしてるんだろう。なら玄関で待ち伏せするしかないわね。

なるべく屋敷を散らかさない様に慎重に、でも速く走る。此処で飛んだら散らかっちゃうでしょ。だから走るの。

玄関に着いた。後は待つだけ。幻想郷一最速の私が本気で走ればこんなものよ。

「ぜえ、ぜえ、アンタ速すぎるわよ・・・」

はたてもやっと追いついたみたい。

「っち(遅かったじゃない」「今舌打ちしなかった？」「気のせいよ」「あっそ」

はたてが来る前に一樹クンが先にきていれば……。

「で？此処で待つのか？」

「そうよ。大天狗様のことからだ時間掛かるし」

「ふん」

しばらく他愛のない会話が続き、そろそろ話が途切れるかと思っ
ていたら。

「あ。いたんだ」

「いたんだじゃないわよ」

一樹クンの御出ましである。

「全く、いきなりシリアスな事話すから忘れちゃったじゃない」

溜め息混じりにはたてが呟く。

「すいません……」

「それはもういいとして、行くっか」

「樹クンが何かやりたいことがあるってのを分かっているから。」

「分かった」「ええ」

「樹クンとはたてが短く返事を返す。あ、この感じ悪くないかも。寧ろいいよな・・・」

ずっと私達が一緒に居られたら、いいなあ

第4話 文&はたてwith一樹 前編(後書き)

紅魔郷は年明けぐらいに始まるかな。それまでオリジナルストーリーをお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8832y/>

東方百目鬼

2011年12月24日10時45分発行